

農事組合法人 実業営農組合（玖珠郡玖珠町大字戸畑）

【経営の概要】

経営形態	生産組織（農事組合法人）
モデルの種類	中山間地モデル
設立時期	（総会）平成19年3月30日（登記）平成19年5月11日
構成戸数	54戸
労働力	基幹6名、補助6名

【経営規模(ha)】

	経営面積	水 稻	麦 類	大 豆	作業受託 (水稻)
			二条大麦		
平成19年	6.5	0	4.0	6.5	延べ 6.5
平成20年	11.4	1.7	1.7	9.7	延べ11.4
平成21年	12.3	2.1	11.4	10.1	延べ12.3

【機械装備】

トラクター 30PS	1台	台車	1台
トラクター 46PS	1台	パワーディスク	1台
田植機 6条植え	1台	ハーベスター	1台
コンバイン 4条刈	1台	中耕ローター	1台
水田ハロー 3.1m	1台	クリーンシーダー(播種機) 4条	1台
畦塗機	1台	ブロードキャスター	1台

【経営の特徴】

米山、田ノ平、天道の3集落共同で取り組んできた中山間地域等直接支払制度の実施主体である実業中山間地営農組合を母体に、農作業受託の実践組織として地権者全員参加型の農事組合法人実業営農組合を設立した。

組織で経営している作物は、大豆と裏作麦（二条大麦）が中心となっている。これら経営圃場については、組合員から販売権も含めた全作業受託契約を結んでおり、組織での水田経営所得安定対策に加入して経営の安定化に努めている。

大豆については、専用の機械を所有するには栽培規模が小さく負担が大きくなるため、近隣の大豆生産組織と連携し機械施設の効率的利用を行っている。

なお水稻については、法人への集積は一部であるが、その他については基幹作業受託をしている。

【導入した新技術】

◎大豆の一条畦立て栽培技術

(手法)

当地域は水はけの悪い圃場が多いため、大豆の安定生産には出芽の安定化が重要な要因となる。そこでちかのりくん、培土板を用いた一条畦立て播種技術を導入し、出芽時の湿害回避を行った。

(結果)

一条畦立て播種を導入したことで、出芽苗立ち率は約1割向上し、当地域における出芽安定化には有効であった。収量・品質面では一条畦立ての有無による差はみられなかった。

(留意点)

効果を高めるためには、額縁排水や中間溝により表面水を速やかに排水する。

播種後の降雨に対して出芽対策としての効果は高かったが、除草剤効果低下に伴う雑草対策への注意が必要。また、降雨の合間を縫っての播種では耕起・播種機の精度低下により安定した播種が行えず出芽が不十分であった圃場もみられた。



＜一条畦立て播種状況＞



＜降雨直後の様子＞
中間溝を通して表面水が速やかに排水



＜額縁排水と出芽時の状況＞



＜大豆安定生産に向けた室内研修会＞

◎大豆の狭畦密植栽培技術

(手法)

大豆の播種適期は梅雨により安定した天候が見込まれず、また当地域の圃場は湿田が多いため播種可能期間が制約される。これまでも適期播種が行えず晩播せざるを得ない状況が多々あった。

そこで、晩播対策として狭畦密植栽培による収量確保に取り組んだ。

(結果)

条間を35cmに設定して、狭畦密植播種を実施した。梅雨明けで天候も良好であったため出芽は安定しており、初期生育も旺盛で早期に茎葉が圃場全面を覆った。そのため雑草抑制にも効果が高く、中耕培土作業も省略できるため管理コストの低減が図られた。

なお、平成21年度は播種が遅れ8月に入ってから播種となったが、生育旺盛で開花期には倒伏が中程度生じた。その後茎の途中から立ち上がったものの収量は大きく低下し100kg/10aを下回った。

(留意点)

晩播対策、作業時間の低減から有効な栽培法であるが、生育環境によっては倒伏のリスクが伴う。そのため適期播きの技術としては前述の一条畦立て播種を用いて、播種が遅れた際の補助技術として狭畦密植栽培を位置づける。

今回の技術実証では明らかにならなかったが、密植栽培による病虫害の被害拡大が懸念される。



＜播種後1ヶ月の状況＞



＜成熟期の状況＞

◎土壌分析に基づく土づくり資材の投入

(手法)

地域内は水稲単作地帯であり、近年麦大豆への取り組みが始まったところである。これまでの肥培管理は、栽培暦に基づき画一的に施用してきた。そのため今回土壌診断を行い、土壌状態を確認し適切な施肥設計を行う基礎資料とした。

(結果)

土壌分析を実施したところ、低PHや各種養分不足圃場がみられた。

このうち、特に有効態リン酸値が適正值以下の圃場が多くみられたため1圃場を用いて溶燐の投入を行い土壌改良を行った。

土壌改良を行った圃場で大豆栽培を行ったところ良好な生育、収量を確保し資材投入の有効性を実証した。

(留意点)

土壌分析を実施することにより、圃場ごとの理化学的特性把握が可能となる。過剰成分の削減は容易でコスト低下にも有効であるが、不足成分の投入についてはコスト面を考慮する必要がある。

◎主な波及活動

- ・玖珠町の大豆生産組織を集めての大豆栽培研修会にて技術実演を行った。
- ・麦大豆生産組織間で現地巡回を行い、栽培技術についての情報交換を行った。

【経営状況】

(10aあたり)

	労働時間(対県平均比)	全算入生産費(対県平均比)	所得
経営全体	4.8hr (-)	11.0万円 (-)	3.3円
水 稲	—		
麦	5.0hr	6.5万円	
大 豆	4.6hr	7.0万円	